

『今鏡』が『大鏡』から受け継いだもの

——(末) に関する表現に着目して——

陳 文 瑤

はじめに

『今鏡』は、序文に大宅世継の孫娘という老嫗を語り手として設定し、体裁を序文・帝紀・列伝・昔語・打聞という構成にならっており、『大鏡』の影響を最も強く受けた作品とされている。しかし、従来その影響は形式のみが着目され、内容面からはその継承関係を子細に検討していないという問題点があった。

『今鏡』の研究においてしきりに挙げられる先行論は、日本古典全書『今鏡』に板橋倫行氏が書かれた解説である。板橋氏は『今鏡』が現実政治に無関心だと説いた。戦後まもなく提示されたこの見解は、その後の『今鏡』観に大きな影響を与えた。この根強い『今鏡』観に揺さぶりを掛けたのが加納重文氏³⁾である。加納氏は「政治」を描く『大鏡』を継ぐものだという『今鏡』の姿勢から、板橋氏の論に批判を加え、『今鏡』は世の動きから目をそらして芸文韻事や風流閑雅の世界に浸したわけではなく、『今鏡』も現実の政治に対して関心を持っていたと、新たな『今鏡』観を提示した。以後、板橋氏に

代表される『今鏡』観が根強く残る中にも、加納氏の見解が次第に支持を得るようになってきた。氏の論が、形式面ではなく、内実の姿勢における継承関係から出発する点は示唆的である。

『今鏡』「列伝」では「末広く」「末おはせぬ」など(末)に関する表現が頻出しているが、(末)に関する表現の多用は『今鏡』のみで見られるものではない。先行作品『大鏡』でも、(末)に関する表現を多用している。『大鏡』の(末)に関する表現については、すでに神尾暢子氏により論じられていた。神尾氏は、『大鏡』が道長榮華の由来を語り、の目的とするため、大臣列伝は冬嗣→道長の流れという大臣を中心として配列されており、『大鏡』では(末)という語によって、冬嗣→道長の流れとそれ以外の大臣とを区別していたことを指摘された。首肯すべき考えであろう。

しかし、(末)に関する表現を区別し、道長榮華に集約していく語りの方法はどこに由来するものであろうか。これは『大鏡』と『今鏡』の継承関係を捉えようとするとき浮上する問題である。本稿では、『今鏡』の列伝にある「末広く」など(末)に関する表現と、「流れ」という語に着目する。『今鏡』の根底にある姿勢が『大鏡』から受け継がれたものと説き明かしたい。

一 藤原氏の流れ

まず、最初に「ふちなみ」の上・中・下三巻の構成と話の流れについて説明する。「藤波」では道長の子どもたちについて述べ、つい

で「梅の匂ひ」では道長の子である頼通について語る。さらに「伏見の雪の朝」で頼通の子の通房と俊綱、「雲のかへし」で頼通の女の姫子と寛子について語る。頼通一族についての話はこれで一旦打ち切つて、次の「白河のわたり」では頼通の弟である教通に話に移る。次いで「はちすの露」では教通の子息ら、「小野の御幸」では教通の女の歎子などについて語る。教通一族についての話はこれで終わる。話の流れは再び頼通一族の方に戻る。続く「薄花桜」では頼通の子である師実について述べる。以下、師通―忠実―忠通―基実―基房の流れがたどられ、「ふちなみ」の上・中両巻は主に頼通―師実一族について語っている。

さて、「ふちなみ」の下巻はどうであろう。「ふちなみ」の上・中巻では、頼通一族を中心とする鷹司殿倫子腹の子孫たちの話が展開するのに対し、「ふちなみ」下巻の「ますみの影」までは高松殿明子腹の子孫について語っている。下巻の「竹の上」からの後半部分では、閑院公季一族の話が語られる。

『今鏡』の構成が『大鏡』よりも整然と整えられていることは誰も頷くであろう。「ふちなみ」の上・中・下三巻は藤氏列伝になっている中に、道長の子孫たち、すなわち、摂関家の流れ（その中をさらに鷹司殿腹の一族と高松殿腹の一族を分ける）と、白河天皇以後帝の祖父となった閑院公季一族を分けて、実に綿密に藤原一族の盛衰を語っている。しかし、前述したように、綿密な語りの中でも「ふちなみ」上・中・下三巻は、特に道長の子である頼通からその子孫

である基房までの一族を中心に据えて語っていると思われる。

以下、この構成に沿って考察を進めていきたい。

1、鷹司殿の流れ

(一) 師実

(1) 末広くつがせる「一人の人」の流れ

①大殿の御末こそは、今に一人のつがせ給ふめれ。その御報に押されて、大将殿もとく葬れ給ひにけるにこそ。『今鏡』ふちなみの上第四「伏見の雪の朝」三八九頁。

②昔は世も上りて、うち続きすぐれ給へるは申すべきならず。またとりわき、御能などは別のことにて、近き世の関白には、大殿とて、叔父の大一条殿の次に一人の人におはしまししこそ、御みめも心ばへも、末栄えさせ給ふことも、すぐれておはしまししか。『今鏡』ふちなみの上第四「薄花桜」四三八頁

③この大殿の御末広くおはしますさまは、男君達、世に知らず多くおはしまして、男僧もあまたおはしますに、御女ぞおはしますぬ。(中略)さて一人のつがせ給へる、太郎におはしましし後

二条関白大臣の御流れこそは、今もつがせ給ふめれ。『今鏡』ふちなみの上第四「波の上の杯」四四六～四四七頁

④では、頼通の長男である通房の早世の原因は、師実の（末）が「今に一人のつがせ」という果報に圧倒されたことにある、と推断している。「一人の人」とは摂政関白の異称である。師実の子孫が今

『今鏡』の語りの設定時期)に至るも摂政関白の職を継いでいるという。師実の子師通、師通の子忠実、忠実の子忠通、忠通の子基実、基房らは皆「一の人」となった。しかし、通房は「一の人」頼通の長男「まうけの関白」¹⁾として期待されていたが、十八歳であつてなぐ亡くなつた。ここでは、「末」という一語に大きな意味を持たせている。すなわち、師実と通房との明暗は、子孫繁栄の違いにより分けられていた。そして、子孫繁栄とは子孫の有無を指すだけではなく、子孫が「一の人」摂政関白という地位を継ぐことである。

②は師実を中心に語る「薄花桜」の冒頭部分で、「一の人」を継ぐ師実を褒め称える箇所である。(みめ)〈心ば〉と並べて、〈末栄え〉が評価されている。師実がすぐれていたのは、彼が叔父の大ニ条殿教通を継いで、「一の人」となるのは勿論のこと、その〈末〉が続いて、「一の人」として栄えたことである。

③は師実の子息を語る「波の上の杯」の冒頭部分である。ここでも師実の「末」が広いという表現を使つて、師実の子女を語り始める。話が師実の子である師通に移り、この師通が「一の人」つがせ給へる」という。師通の存在は「一の人」の流れを継ぎ、〈今〉の基房までも続いていることに意義があつた。

(2) 末おはせぬ

語りの中心に据える流れである頼通―師実の〈末〉の栄えが、「一の人」を継承するのに対比して、『今鏡』では「末おはせぬ」という

表現で傍流の子孫の不振を語っている。

④いと末おはせぬに、土御門の右の大臣の姫君をぞ養ひ子にて、大殿の北の政所と申しし。『今鏡』ふぢなみの上第四「はちすの露」四二四頁)

⑤二条殿の次御子は、三位の侍従信基とておはしき。三郎にては、九条の太政の大臣信長とておはせし。それもはかばかしき末もおはせぬなるべし。『今鏡』ふぢなみの上第四「はちすの露」四二六頁)

前述したように、『今鏡』が語りの流れの中心に据えるのは頼通一族でありながらも、「白河のわたり」「はちすの露」「小野の御幸」三章では、その兄教通一族の話が語られる。④は教通の子息たちについて語る「はちすの露」の一節である。頼通の弟である教通の一人信家は、「いとよき人」でありながらも、子孫が全くなかつたことについて、「いと末おはせぬ」という。また、⑤教通の他の子息たちについて述べるころでも、「はかばかしき末もおはせぬ」といい、教通の子孫の不振が語られる。師実一族の「末広く」「末栄え」とは対照的に語られている。

このように『今鏡』では主流として語られる頼通―師実の流れについて語る時、「末広く」のような表現を使う。一方、傍流になる教通の流れについて語る時は、「末おはせぬ」という表現を使う。②のところでも触れたように、師実が叔父の教通を継ぎ、「一の人」となつた。「一の人」を継げなかつた教通の子息たちについて、「末おは

せぬ」と表現する。頼通一族と教通一族の栄えの分岐点を、その「末」が「二の人」を継ぐかどうかにあるように思わせている。

以上、検証した通り、師実から語りの現在まで、「二の人」が連続して一族が繁栄することを作者は強調しているので、必然的に「末」に注目し、〈流れ〉を継ぐか否かにも注目した。今の「二の人」基房までの流れは、頼通―師実から「末広く」継いできた。これに対して、継げなかった教通一族は、「末おはせぬ」と評される。

(二) 基房

⑥この二人の摂政殿たち、みな御子おはしますなれば、藤波のあ

とたえず、佐保川の流れ久しかるべき御有様なるべし。『今鏡』

ふちなみの中第五「藤の初花」五一―八頁

⑥では、続けて「二の人」となる基実と基房の子孫について「藤波のあとたえず、佐保川の流れ久し」と、藤原氏の栄えに賛辞を送っている。頼通―師実から「末広く」継がせてきた「二の人」基房は、藤原氏の血統の流れ、特に「二の人」としての血統の流れを絶やすことなく受け継いできた。「末」は「二の人」という地位を絶やさずに継ぐことにこそ意味がある。

2、高松殿腹の流れ

「絵合の歌」の冒頭部分「鷹司殿の御腹の君達の御流れは、みな申し侍りぬ」と宣言したように、『今鏡』はこの「絵合の歌」からは

高松殿の御腹の流れを述べようと明言した。

高松殿腹の流れの記述は、前述の鷹司殿腹の流れほど詳しく語られてはいないが、『今鏡』の方針に従って外れることがなく語られてゆく。

(一) 兼頼

⑦この大臣の太郎にては、兼頼の中納言おはしき。御母女御の一

つ御はらから、いと末のはかばかしきもおはせぬなるべし。『今鏡』ふちなみの下第六「絵合の歌」七頁

(二) 俊家

⑧次には右大臣俊家の大臣、大宮の右の大臣ときこえ給ひき。この御末多く栄え給ふめり。『今鏡』ふちなみの下第六「絵合の

歌」八頁

鷹司殿腹の流れの項目で述べたように、主流の頼通一族については、「末広く」と表現するが、その他の傍流については「末おはせぬ」と表現する傾向がある。この傾向は高松殿腹の流れについても変わらないのである。⑦「絵合の歌」で頼宗の子どもたちについて語る箇所、兼頼が「いと末のはかばかしきもおはせぬ」と兼頼の子孫の衰退を語る。対して、⑧では頼宗のもう一人の子、兼頼の弟である俊家について、「この御末多く栄え」と、俊家の子孫繁栄を語る。高松殿腹の流れについては、俊家一族が主流として語られるため、俊家を「末多く栄え」と表現する。一方、兼頼一族が傍流となる

ため、兼頼を「末おはせぬ」と表現する。つまり、主流と傍流の（末）の榮え、衰えがはつきり語り分けられている。

二 源氏の流れ

『今鏡』は藤原氏の「ふちなみ」に続いて、「むらかみの源氏」という一巻を立てている。なぜ『今鏡』は「ふちなみ」の次に「むらかみの源氏」という一巻を立てるのか。その理由は、「むらかみの源氏」の冒頭の文章から窺うことができる。

⑨藤波の御流れの榮え給ふのみにあらず、帝、一の人のはなれぬ方には、近くは源氏の御流れこそ、よき上達部どもにておはすめれ。堀河の帝の御母賢子の中宮は、大殿の御子にて参り給ひつれど、誠には六条の右の大臣の御女なり。后の御ことは、帝の御ついでに申し侍りぬ。その御ゆかりの有様、源を尋ねれば、いとやむごとくなくむ侍り。『今鏡』むらかみの源氏第七「うたたね」一七〇頁）

⑨では藤波（藤原氏）の（流れ）が榮えているだけではなく、帝や「一の人」の近くには、源氏の（流れ）もあることを述べる。「一の人」師実の娘である賢子は、六条右大臣頭房の娘である。その賢子に関連して、語り手は実父である頭房の村上源氏一族について語り始める。「二の人」として榮える藤原氏一族と源氏一族との深い関わりが、ふちなみの中第五「藤の初花」でも語られている。

⑩この次の一の人には、今の摂政大臣おはします。御母これも國

信の中納言の三の君にぞおはすなる。御名は国子ときこえ給ふ。

三位し給へりとぞ。一の人藤氏の御母の多くは、源氏におはします。しかるべき事にぞ侍めれ。宇治殿、二条殿の御母は、一条の左大臣の御女、後の二条関白殿のは、土御門の右の大臣の御女、法性寺殿は六条の右大臣、この殿二所、源中納言の姫君二所におはします。藤氏は一の人にて、源氏は御母方やむごとなし。御流れかたがたあらまほしくも侍るかな。『今鏡』ふちなみの中第五「藤の初花」五一六頁）

⑩では基房の経歴と事績について語る前に、基房の母国子に関連して、摂関の母が源氏出身者であることを語る。「一の人藤氏の御母の多くは、源氏におはします」と述べるように、藤原氏の「一の人」の母は村上源氏出が多いのである。その根拠として、宇治殿頼通と二条殿教通の母倫子、後二条殿師通の母麗子、法性寺殿忠通の母師子、基実と基房の母信子と国子が挙げられている。注目したいのは麗子の父は土御門右大臣師房で、師子の父は六条右大臣頭房ということである。さらに、信子と国子の父は、頭房の子国信である。つまり、「二の人」の流れである師通―忠通―基実―基房の母方は、師房―頭房―国信という源氏の（流れ）になる。軸になる藤原氏の「一の人」との繋がりがあからこそ師房―頭房一族の話が語られるのである。

ここで、「むらかみの源氏」一巻の構成と流れを整理しておく。

「むらかみの源氏」の最初の一章「うたたね」では、具平親王が

ら村上源氏の源流を語り始める。そして、師房、その子の俊房・顕房について語る。特に「うたたね」の後半は顕房を中心に語るが、顕房の話は一旦打ち切られ、次の「堀河の流れ」では俊房一族に話題が移る。「堀河の流れ」は章段名の通り、堀河左大臣俊房の子息である師頼、師時、師俊らについて語る。以下、「夢のかよひ路」で師頼・俊房の僧君たち・娘たちについて語る。そして、その次の章「根合」では話が再び顕房一族に戻り、「有栖川」と二章にわたって顕房の娘賢子の女官たちについて語る。続く「紫のゆかり」では、顕房の子である雅実について述べる。以下、「新杖」、「武蔵野の草」、「藻塩の煙」までは顕房一族の話が語られる。「藻塩の煙」末尾で俊房・顕房の他の兄弟が語られ、「むらかみの源氏」は終わる。こう整理してみると、「むらかみの源氏」は俊房一族と顕房一族が対照的に語られる巻と考えてよかろう。

(一) 俊房と顕房

⑩この兄弟の、大殿の少将におはしける時に、隆俊の治部卿、御婿にとり申さむと思ひて、その時盲ひたる相人のありけるに、「かの二人如何相し奉りたる」と問はれければ、「ともによくおはす。みな大臣に至り給ふべき人なり」と言ひけるを、「いづれか世にはあひ給ふべき」と問はれるに、「弟は末広くなど一人の人も出で来給ふべき相おはず」と申しければ、六条殿をばとり申したるとぞ聞き侍りし。そのかひありて、帝、関白もこの御末より

出で来給へり。『今鏡』むらかみの源氏第七「うたたね」一七頁)

先に述べた『今鏡』の「流れ」末重視は、「むらかみの源氏」第七の最初の章「うたたね」にも窺える。⑩において治部卿隆俊が俊房・顕房のいずれを婿にするかという時、盲目の相人に俊房・顕房の将来を相してもらったという逸話が語られている。この逸話では弟の顕房の方が子孫が多く、「一人」が出る相だという。しかし、『尊卑分脈』によると、俊房が十七男二女、顕房が十七男三女で、特に顕房の方が子孫が多いということでもないのである。『今鏡』では、「末広く」か否かということ二人を対照させる。先にも述べたように、顕房は「一人」忠通の母方の祖父である。顕房の「末広く」は「一人」と関わって初めて意味を持つことになる。つまり、顕房は「一人」の祖父である故に、「むらかみの源氏」で語りの中心に据えられているのである。

(二) 「一人」の祖父

⑫この中納言の姫君、大君は、近くおはしましたし少将殿の御母になど申すなるべし。次には入道殿にさぶらひ給ひて、さがりたき人におはすなり。第三の君は、今の殿の御母におはします。三位の位得給へるなるべし。うち続き二人の一人の人の御祖父にて、いとめでたき御末なり。(むらかみの源氏第七「武蔵野の草」

二五九頁)

⑩は頭房三男中納言国信の子女たちについて語る箇所である。国信について、「いとめでたき御末」と語られている。国信が「うち続き二人の一人の祖父」、めでたい〈末〉と言われるのは、娘の大君信子が産んだ基実、三の君国子が産んだ基房が続いて摂政の地位についたからである。頭房と同様に、「一人の」の祖父として存在することに意味があるのである。

(三) 末おはせぬ

⑪又楊梅の大納言頭雅とて、六条の大臣殿の御子おはしき。その末いとおはせぬなるべし。(むらかみの源氏第七「武蔵野の草」二六五頁)

前に述べた〈末〉を対照的に語る傾向はここにも見られる。⑫で述べたように国信は「一人の」の祖父として、めでたい〈末〉と語られる。対して、⑬その兄弟の頭雅は〈末おはせぬ〉と言われる。『尊卑分脈』によると、頭雅の男は美濃守雅長以下八名が見える。孫は頭定の子の定宗一人だけであるが、〈末おはせぬ〉というのは、高い官位、特に「一人の人」についたものはいないという意であろう。

⑭六条殿の御子には、又をとこも、丹波の前司、和泉の前司など申しておはしき。はかばかしき末もおはせぬなるべし。(むらかみの源氏第七「武蔵野の草」二七五頁)

また、⑮その他の兄弟、丹波の前司季房、和泉の前司雅隆についても〈末おはせぬ〉という表現が用いられている。『尊卑分脈』によ

ると、季房の子は従五位下忠房一人、雅隆の子は従五位下阿波守雅清と僧となった子が三名見える。いずれも官位が高くなく、「一人」とはほど遠い地位にある。

⑯六条の大臣、あさましく末広くおはします。昔より藤波の流れこそ、帝の祖父にては、うち続き給へるに、堀河の院の御祖父にめづらしくきこえ給ひしか。かく末栄え広ごらせ給へり。一人の人の祖父となり、うち続きておはします。(「藻塩の煙」二八四頁)

頭房一族についての記述は⑯のように締め括られている。頭房一代の栄えというより、一族の〈流れ〉が重視され、その〈流れ〉が続けられるかどうか、つまり一族の〈末〉は広くなるかどうかは注目されることである。更に、その〈末〉が「一人の人の祖父」となることには意味がある。

作者の俊房に近い立場により、俊房一族について惜しまぬ贅辞を送ったといわれるであろうが、〈流れ〉を重視する『今鏡』では、個人個人を讚えるよりは、一族の〈流れ〉が「一人の人の祖父」として広く永く続けられるかどうか、の方が中心になっている。

三 源を知り、末の流れを汲む

——『大鏡』から受け継いだもの——

さて、なぜ『今鏡』ではこれほど〈末〉〈流れ〉に拘るのであろう。それについて、『今鏡』は以下の如く明言している。

⑯ 源を知りぬれば、末の流れ聞くに心くまれ侍り。(序・一八頁)

⑰ は「序」で軀が述べた言葉である。事の初めを心得ておりますので、後のなりゆきを聞いてもよく意味がわかります。物事の推移の源を探ることによって、現状を正しく認識し理解することができるといふ『今鏡』の基本姿勢をあらわす言葉といえよう。

⑱ 世継は、入道太政大臣の御栄えを申さむとて、その御事をこまかに申したれば、その後より申すべけれど、水上あらはれぬは、流れのおぼつかなければ、まづ入道大臣の御有様おるおる申し侍るべきなり。(ふぢなみの上第四「藤波」三七〇頁)

⑲ では、「水上あらはれぬは、流れのおぼつかなく」と、源が明らかでないなら、末の流れもはっきりしないという基本姿勢を表している。この様な基本姿勢により、藤原氏の列伝を語ろうとする軀は、まず、「ふぢなみ」冒頭でその根源に位置する道長について語るといふ。

⑳ ⑲に示したような基本姿勢により、『今鏡』は流れの変遷をはっきりさせようと源を溯りながら、叙述の中ではつねに〈末〉の様子も留意されている。源を探るのは重要視されるが、実はその目的は〈末〉をはっきりさせようとするのである。故に〈末〉という語に関する表現も多用されていると考えられる。

㉑ 『今鏡』のこのような基本姿勢は『大鏡』から受け継いだものだと考えられる。『大鏡』の大臣列伝は、冬嗣系の大臣の列伝と言えななかも、道長の直接の祖である長良の子孫に限定されていた。

㉒ かくいみじき幸ひ人の、子のおはしまさぬこそ口惜しけれ。御

兄の長良の中納言、ことのほかに越えられたまひけむ折、いかにばかり辛う思され、また世人もことのほかに申しけども、その御末こそ、今に栄えおはしますめ。ゆく末は、ことのほかにまさりたまひけるものを。(『大鏡』「良房伝」六六く六七頁)

神尾暢子氏は「冬嗣の子息長良と良房、良相との明暗を分けたのは、当人一代の栄達ではなく、子孫繁栄の落差」であると、それが〈末〉という語に関する表現により反映されている、と指摘する。この方法は、前述した①②の『今鏡』の師実について語る箇所と同工異曲の妙といえよう。

前に考察してきたように、『今鏡』は「二人の人」撰政関白としての流れを継がせた人が否かによって、〈末広い〉と〈末おはせぬ〉と區別する。この傾向は『大鏡』と相通じる。しかしながら、『今鏡』は『大鏡』のように道長一個人の栄華の由来を追求するものではないので、〈末〉が「一人の人」の縦の流れと横の流れに使われ、〈流れ〉により注目する。

『大鏡』帝紀と列伝の間にはさんだ世継と重木の対話の場面で、世継の語りのなかに次のような言葉がある。

㉓ 流れを汲みて、源を尋ねてこそは、よくはべるべきを、(下略)

(『大鏡』六三頁)

結果をながめ、その源流をさぐってこそ、はじめて真相もよくわかるはずと、結果と原因の両方を探求して真相に到達するという『大

鏡』の基本姿勢の現れといえよう。この基本姿勢は次の箇所にも
ぞいている。

⑨「あきらけき鏡にあへば過ぎにしも今ゆく末のことも見えけり」

と言ふめれば、世次いたく感じて、あまた度誦して、うめきて、

返し、「すべらぎのあとつぎつぎかくれなくあらたに見ゆる古

鏡かも（下略）」

帝紀が語られた後列伝に入る前に、登場人物で二人の高齡の翁、

重木と世継が唱和する箇所である。重木が「過ぎにしも今ゆく末の

ことも見えけり」と、世継が「かくれなくあらたに見ゆる」と詠ん

だ通り、『大鏡』は過去・現在・未来をはつきりと見せ、歴史の真実

おわりに

以上、『今鏡』の〈末〉という表現に着目し、この表現に含まれる
意味を考察してきた。〈末〉は「一人の人」摂政関白になり、藤原氏の

「一人の人」としての流れを継いだという内包的な意味を持っている
といえよう。また、〈末〉の状況の表現方法の相違によって、「一人

人」としての流れを区別するだけでなく、その流れになりえた故をも
説明する。こうした〈末〉に込められた意味は、⑩⑪にも説明し
たように『今鏡』の根底にある姿勢から発するものと考えられる。

同時にまたこの姿勢は、『大鏡』から受け継いだものであることも明
らかである。

〔注〕

(1) 木藤才蔵氏 「鏡物の系譜」 (『日本古典文学基礎知識』
等、多くの先行論文及び解説はこのようにとられている。

(2) 板橋倫行氏 「解説」 (『日本古典全書』『今鏡』、昭25、朝日
新聞社)

(3) 加納重文氏 「今鏡の世界—今鏡の政治意識の所在とその解
明—」 (『国語国文』37巻6号、昭43・6)

(4) 神尾暢子氏 「大鏡大臣の子孫規定—用語「する」の表現機能
—」 (『学大国文』39号、平8・1)

(5) 『今鏡』の本文はすべて『今鏡全釈(上・下)』(海野泰男著、
昭58、福武書店)により、一部私に傍線を施した。また引用
の末尾に巻名と頁数を記した。

(6) 通房が「まうけの関白」と期待されながらも、十八才の若さ
でなくなることは、ふちなみの上第四「梅の匂ひ」の最後に
語られている。

(7) 海野泰男氏は『今鏡全釈』「うたたね」の「補注」(昭58、福
武書店)『今鏡』が「むらかみの源氏」一卷を立てた理由と
して、「時代の必然のなりゆき」を挙げられている。海野氏は、
『今鏡』が描こうとした時代から見て、必然的に「むらかみ
の源氏」は記述されたと指摘される。しかしながら、稿者は
〈一人の人〉との強い関わりにこそ、「むらかみの源氏」を成立
の必然をみてとる。

(8) 海野泰男氏は『今鏡全釈』「解説」(昭58、福武書店)

において

『今鏡』は顕房についてのエピソードに詳しく、俊房については娟子内親王との密通を伝えるくらいで、あまり生彩のある逸話はないが、その理由はわからない。

と述べているが、稿者は「二人の祖父である顕房と対照的させることに理由があると指摘したい。

(9) 平井一博氏 『今鏡』に見る村上源氏の二つの流れ―特に俊房系賞揚の意識について―『古代文化』51―3、平11・3)

(10) 『大鏡』本文の引用は、新編日本古典文学全集『大鏡』(橋健二・加藤静子校注・訳、平8、小学館)により、一部私に傍線を施した。また引用の末尾に巻名と頁数を記した。

(11) 前掲注(4)の神尾論文。

——チエン・ウエンヤオ、広島大学大学院博士課程後期在学——